

# 「アバター」

—初稿—

2026/5/24

〈人物表〉

矢沢透

(19)

丸バツ大学の一年生

矢沢充

(19)

透の双子の弟、丸バツ大学を目指す浪人生

矢沢貴子

(48)

透と充の母

矢沢康二

(50)

透と充の父

藤倉花音

(19)

丸バツ大学の受験生

ジエームズ・キャメロン監督作品の『アバター』からタイトルだけ拝借

1. 矢沢家・透の部屋（朝）

部屋の一角には写真立て。卓球のダブルスに臨む透と、双子の弟・充の写真。瓜二つの二人。

棚には二人の名前が刻まれた数々のトロフィー。

矢沢透（19）、ベッドでグースカと寝ている。

貴子の声「透ちゃん、起きて！ 透ちゃん！」

と、母・矢沢貴子（48）、透を叩き起こす。

透、寝ぼけ眼を擦りながら、

透 「何？ 今日大学も部活も休みだってば……」

貴子、慌てふためいていて、

貴子 「充ちゃんが、充ちゃんが……」

透 「？」

2. 矢沢家・充の部屋（朝）

充 「……うう、うう」

矢沢充（19）、ベッドでうなされている。

顔は真っ赤で上の空。おでこには冷却シート。

貴子と透、ドアからそっと覗いている。

透、息を呑む。

貴子、サツと机の上から何か取って、ドアを閉じる。

貴子 「……頼んだからね」

と、透に一枚の紙を渡す。

透 「え？」

紙には「丸バツ大学 一般入試 受験票」の文字。

隅には充の写真。自信に満ちた表情。

3. 矢沢家・食卓（朝）

食卓には、とんかつ。

康二 「まあ、ドーンといけよ」

と、父・康二（50）、朗らかに朝食を食べている。

康二 「春から同じ大学なんだし、次は充に代返でも頼んだらい

いさ。こういうのはお互い様だ」

と、白飯をかき込む。

向かいの透、食が進まない。

康二 「……なーにをそんな心配してんの」

透 「いやバレるだろ。絶対に」

康二、呆れて、ため息。

康二 「……大学入試って血液検査でもあるの？」

透 「は？」

康二 「正直俺ね、今お前が透じゃなくて充でも驚かないよ？」

貴子 「うん、どこが違うのか教えて欲しい」

貴子、打って変わって落ちて着いている。

康二 「だよなあ？」

透、言葉に詰まって、

透 「ここにあるから！俺にはここに、ホクロが！」

と、指すのは右頬の小さな泣きボクロ。

康二・貴子 「……へーえ」

と、興味津々で覗き込む。貴子、おもむろに懐からBBクリームを取り出し、ホクロを塗り潰す。

貴子 「画竜点睛ってやつ」

透 「おい！」

康二 「大丈夫だって。親でも分かんないんだから」

透 「充はいいのかよ」

貴子 「もちろん。二浪なんて可哀想」

透 「そういうことじゃなくてさあ」

康二 「充は今あんなだし、受けないで終わるよりマシだろ」

貴子 「ほら透ちゃん、ご飯食べたら行かなきゃ」

透、時計を見ると八時を回ったところ。

康二 「……元々今年も厳しいって話だったんだ。お前も充とダブルス組んで、インカレ勝ちたいだろ？」

透 「……それは、そうだけど」

康二 「まあ、食えよ」

透、ややあって、とんかつを頬張る。

#### 4. 矢沢家・洗面台の前（朝）

透、受験票の写真を見て、同じ髪型に入念にセット。

貴子の声 「透ちゃん！？」

透 「今行くから！」

5. 丸バツ大学・正門前（朝）

「一般入試 試験会場」の立札。

多くの受験生らに紛れて透、門をくぐる。

6. 丸バツ大学・大教室（朝）

受験生ら、席で試験の開始を待っている。

試験官、机の受験票の顔写真をチェックして回る。

透の番。緊張しつつ、試験官と目を合わせる。

試験官、目を細め、透の顔をまじまじ見つめる。

透、固まる。

試験官、何事も無く、次の受験生へ。

透、安堵。

ふと、隣の受験生・藤倉花音（19）に目を止める。

透、花音の横顔にハッと見惚れる。

7. 丸バツ大学・大教室（朝）

チャイムの音。

試験官「試験を始めてください」

受験生ら、一斉に問題用紙を開く。

透、解答用紙の氏名に「矢沢充」と記入。

透、すらすらとシャーペンを走らせていく。

8. 丸バツ大学・大教室（昼）

昼の休憩時間。

静かな大教室で食事を取る受験生ら。

透、弁当を開こうとするも、

受験生Aの声「いや数学まじ簡単くなかった？」

見ると、学ランの受験生らが答え合わせをしている。

受験生A「大問1は3分の4ルート5っしょ？」

受験生B「良かったー、俺も。え、次のやつは？」

答え合わせの声が大教室に響く。

他の受験生ら、迷惑そうな顔。

気にせず答え合わせの音が続く。

透、無視して弁当の蓋に手を掛けようとするも、隣で花音、困り顔でぎゅっと耳を塞いでいる。ふと、目が合う。

何か助けを求めるような目。

透、誤魔化すように立ち上がり、学ラン達の元へ。

透 「……ちよっと」

受験生A「？」

学ラン達、透を見上げる。

透 「……そういうの、聞きたくない人もいるからさ、別のとこでやってもらえる？」

学ラン達、軽く頭を下げ、静かになる。

透、席に戻る。

花音、透に軽く会釈。

透、照れつつも応じる。

## 9. 丸バツ大学・正門前（夕方）

試験終わりの受験生らでごった返している。

予備校のスタッフ「試験お疲れ様でしたー」

と、ティッシュやらチラシやらを配る人々の列。

透、無視して通り抜けようとするも、肩を叩かれる。

面倒臭そうに振り向くと、そこには花音。

花音 「あの、さっきは、ありがとうございます」

透、息を呑む。

二人、人の流れに押され、並んで歩き出す。

## 10. 丸バツ大学・正門前の通り（夕方）

透、動揺していて、

透 「あー、どういたしまして」

花音 「おかげで午後もすごい集中できて、本当に感謝してます」

透 「なら、よかったです」

花音 「あの、良かったらインスタ交換しません？」

透 「え？ あー、いやあ」

花音 「私、藤倉花音って言います。出身は青葉学院で、今は一浪です」

透 「あ、えーと僕はその」

花音 「矢沢充くんでしょ？」

透 「え？」

花音 「受験票、勝手に見ちゃった」

透 「ああ」

花音、右頬のホク口を指して、

花音 「ここ、私も泣きボク口あるの」

と、得意げに笑う。

透 「……あ、そうなんだ。へーえ」

花音、スマホのインスタ画面を差し出すも、

透 「……え？」

透、固まる。

花音 「あ、受かってからの方が、いい？」

透 「ああ、うん。そうかな」

花音 「じゃあ、また今度で」

花音、横断歩道の向こうへ歩き出す。

花音 「じゃあね、本当にありがとうね！」

と、手を振る。

透、呆然としつつ、応じる。

花音が見えなくなると透、スマホでホク口を確認。

BBクリームは跡形もなく取れている。

## 11. 矢沢家・リビング（夜）

クラッカーの音。

貴子・康二「合格、おめでとう！」

リビングの壁には「充ちゃん 合格おめでとう」の

手書き横断幕やら装飾やら。

お祝いの食事を囲む、矢沢家の四人。

充 「ありがとう！」

と、満面の笑み。

貴子、チキンやらを取り分けて、

貴子 「これからも兄弟、支え合ってちょうだいね」

充 「危うく首席合格で入学式の挨拶させられるところだったよ」

透 「お前、少しは恥を知れよな」

充 「俺は卓球ができれば、なんでもいいのよ」

康二 「いやあ、どうなることかと思っただけどよかったよかった」

康二、チキンを頬張って、

康二 「まあ、お前らこれで、運命共同体だな」

と、ニヤッと笑う。

透、バツの悪い顔。

## 12. 丸バツ大学・正門前（朝）

部活やサークルの新入生勧誘でゴった返している。

## 13. 丸バツ大学・卓球部練習場・入り口（朝）

充 「新入生って他に強えー奴いんの？」

透 「んー、まだ分かんない」

と、上履きに履き替えている。

透 「入学早々合流してんの、お前くらいだし」

充 「一年も待たせて、悪かったね」

透 「……待ちくたびれたよ」

と、ニヤッと笑う。

透、練習場の扉を開けると、パソコンパソコンとピンポ

ン玉を打ち合う音。

透 「？」

## 14. 丸バツ大学・卓球部練習場（朝）

体育館にズラッと並べられた卓球台。

その一つの台、練習している女子部員がいる。

見ると、豪快なスマッシュが決まる。

透の足元に玉が転がってくる。

女子部員の声 「すいませーん！」

透、玉を拾い、投げてあげる。

相手は花音である。

花音 「ありがとうございます！ あ、私、女子の方に入りました

た新入生の——」

透、目を疑う。

花音も何やら気づいて、

花音 「あ！」

と、駆け寄る。

花音 「充くん、だよね！ びっくり！」

と、透に話しかける。

透 「え？ え？」

花音 「卓球部、入るの？」

透 「ああ、うん、入るのってどうか……」

花音 「てか充くんって、双子だったんだ？ 二人とも新入生？」

と、充にも話しかける。

花音 「私、藤倉花音って言います。充くんとは受験で——」

充 「いや充は俺だけど」

花音 「え？」

透 「ちょっとお前、こっち来い！」

と、慌てて充を抱え込み、更衣室へ。

花音 「？」

## 15. 丸バツ大学・卓球部練習場・男子更衣室（朝）

透、充の顔を掴み、黒ペンで泣きボクロを書き込む。

充 「なにになにどういうこと？」

透 「……運命共同体だろ！」

充 「はあ！？」

## 16. 丸バツ大学・卓球部練習場（朝）

花音と充、インスタを交換。

花音 「これからよろしくね」

充 「う、うん」

花音 「本当そっくりだねー」

遠くで筋トレをしている透、その様子を見守る。

透の泣きボクロはクリームで消されている。

が、汗が滴り、クリームが滲んでいく。

卓球台の向こう、二人の笑い合う姿。

透、一瞥しては、一心不乱に筋トレを続ける。

（おわり）